

三好邦達(監修)
「早期リハビリテーションマニュアル」

黒川 幸雄
(北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科)

本書は、大学病院における20年間のリハビリテーションの総決算ともいえる著作であるが、従来のリハビリテーション関係の成書としては数少ない領域を視野に入れた大変利用価値の高い労作である。

リハビリテーション医学医療は、ともすれば後遺症に対しての回復期・慢性期の医療にみられやすい弱点を有しているが、そもそも回復期・慢性期の経過の良し悪しは急性期の対処如何にかかっているわけで、急性期医療をリハビリテーション医学医療の視点できちんと把握して実践している施設は、大変数少ないことが予想される。この点からも本書の生まれる背景にある聖マリアンナ医科大学病院リハビリテーション部における20年間のリハビリテーション医学医療の実践は大変貴重なものであり、本書の意義についても大いに語れ、読まれる部分があることを強調しておきたい。

本書が扱っている対象疾患は、第1章において脳損傷、第2章において整形外科疾患、第3章において心疾患、第4章において糖尿病、第5章において呼吸器疾患、第6章においてNICU、そして最終章において熱傷となっている。これらの疾患は、一般的には大変なじみのあるものであるが、理学療法士が急性期のリハビリテーション医学医療として取り組んでいるところは数少なく、今後の展開を期待する部分が多々ある。こうした分野に果敢に積極的にエネルギーを傾注しているのが、本書を生んだ聖マリアンナグループである。理学療法士が第一線の内科、外科、救急、整形外科などの医師、看護婦などのスタッフと連携して理学療法を実践できるのも聖マリアンナ医科大学病院のリハビリテーション医学医療を先導してきた三好先生に負う

部分が多大であったといえるであろう。

大学病院のリハビリテーションは general でなければならぬと三好先生は普段からよくいっていたというが、特に患者を勇気づけ、よくなろうとする意欲を引き出すのがリハビリテーションの第一歩であるともいっていた。高度専門医学医療を実践し、まず病気を治療することに比重がかかりがちな大学病院という場と矛盾するような心の重視を訴えられていたことは、畏敬に値する。この相矛盾しがちな2つの側面を結びつけ、納得を呼び起こすのは、art と science であろう。本書のすばらしい点は、art を有していること、心の治療を見据える視点である。また science としての技術を提示し、駆使しやすく記載している点にある。

本書が、これから急性期医療の中で理学療法を実践したいと志を抱いている諸氏に、また現在急性期医療の中に身をおいて奮闘されている理学療法士諸氏に、そして急性期を抜け、回復期・慢性期の医療あるいは福祉(地域など)で働く理学療法士諸氏にとっても、大変有効であることを強調したい。

生物の世界には生物連鎖(環)というものがあり、小さな生物と大きな生物には回り回って大きな連なりがあるというように、リハビリテーション医療福祉にも、地域の患者・障害者の状態を決定づける急性期医療の対処の問題が、深く結びついていることを理解しなければならない。こうした意味からも相互にとって本書のように20年間の大学病院におけるリハビリテーション医学医療の実践をふまえた成書が大いに役立つものと確信できる。

最後に本書の序文・追記にある三好邦達先生の高い理想を実現すべく生まれたことを申し添え、その意志が多くの読者の心に響くことを期待し、書評をとじることにしたい。

(B5, 310 頁, 定価 8,000 円/税込, 送料 380 円, 三輪書店・刊)